南洋館

與謝野寛

青空文庫

緑の褪めた、
砂と塵挨だらけの、
水気のない、
いぢけた、倭い椰子の木立、
木伊乃にした、動かない天狗猿、
死んだ、みすぼらしい、ちつぽけな鰐、
くすんだ、黄土とCHOCOLAT《ショコラア》の色をした
廉物の、摸造の爪哇更紗、
まだ一度も生血を嘗めず、
魂の入らぬ、
ひよろ長い毒矢の数々……
え？　これが大正博覧会の南洋館？

最初の二つの室を観て歩いて、
おれは思はずおれの子供等に言つた、
「こんなぢやない！　こんなちやない！　南洋は！」

そして、おれは新嘉坡を想ひ出した。

こんなぢやない！　こんなぢやない！
あの赤道直下の生活はこんなぢやない！
PAUL《パウル》CLAUDEL《クラウデル》が目を眩したも道理、
そこは光と熱と香と色の世界だ、
華やかな、目まぐるしい現象のみの世界だ、
醇粋な真実のみの緊張した世界だ、
万別の力が醱酵し、蒸騰し、
渦を巻いて荒れ廻る世界だ、
宇宙の最初の元気が、
汚れず、混らず、淀まずに燃えて居る世界だ。
太陽は白金を焼いて居る、
海は碧玉の湯を湛へて居る、
土は朱を盛り上げて居る。
空気は火の台風だ、
雨は銀の驟雨だ。

どの物にも鈍い弱い色がない、
真赤だ、黄金だ、雪白だ、猩々緋だ、
藍だ、群青だ、深緑だ、紫だ。
どの物にも煩瑣な分類がない、
植物も動物だ、人間だ、
人間も植物だ、動物だ。
或樹は髯を垂れ、百手を延し、
十、二十の脚を柱の様に立てて居る。
或樹は扇形の騎士の兜を被り、
或樹は細長い胴に真赤な海老の甲を着けて居る。
或蛙が牛の声で吼える。
或蛇が鈴を振る。
一尺の守宮が人間に呼び掛け、
二丈の鰐が人間を餌にする。
人間は丸木舟の殻に乗つて走る貝だ。
猿は猩々の表情と姿で抱き合ふ人間だ。
春夏秋冬の区別もない、

植物は芽と葉と枯葉と、
蕾と花と果とを同時に持つて居る。
片端から熟して、枯れて、
片端から新しく生んで行く。
人間もさうだ！
手ぬるい夢や憧憬や、
しちめんどうな瞑想や、
小賢しい商量や、虚偽や、
馬鹿らしい後悔や追憶を必要とせずに生きて行く。
彼等は流転を流転の儘に受け入れる。
唯だ珍重するのは愛情だ、
労働だ、勝利の欲だ、
そして其等を讃美する芸術だ。
寝たくて寝る、
歌ひたくて歌ふ、
働きたくて働く、
踊りたくて踊る。

恋しい女は奪つても愛する、
憎い敵は殺して仕舞ふ、
勝つた者は正しく誇る、
負けた者は復讐を企てる。
生、老、病、死は順当な流転だ、
花の開落だ、
そんな事を気にする習慣なんか持て居ない。
自然と生物とが同じ脈を搏ち、
同じ魂と同じ意欲を持ち、
同じ生の力を張り詰めて動くばかりだ！
若し醇粋な人性を保留して居る彼等に、
羞恥の道徳を説いて聞かせたなら、
彼等は目角を立てて怒るだらう、
そして云ふだらう、「大自然の心を知らない、
堕落した人間の余計な僻みだ」と。
彼等は赤裸々で居る、
太陽が赤裸々で居る如くに！

そして、彼等が華やかな爪哇更紗の一片で、
または新鮮な一枝の木の葉で、
人間の樹の中央につけた性の果を蔽ふのは、
礼儀でもなんでもない、
椰子が其果の核を殻皮の中に蔵めて、
風雨と鳥獣の害を防ぐやうに、
彼等もまた貴い種の宮を、
敵と動物の害から護るのだ。

こんなのぢやない！　あの生々した南洋は！
おれは斯う思つて次の室へ行つた。
そこには病人らしい南洋の男女が、
青黒い、萎びた肌で、
気乗のしない虚偽の表情と、
――おまへ達は虚偽を知らない筈だのに！――
張りのない、浮調子な声とで、
狭い舞台に、

――ああ、おまへ達は珊瑚礁の島が恋しからう！――
踊つたり歌つたりして居る。
可哀相に！　彼等は
小屋(こや)に一ぱいになつた見物から、
「なんだ！　面白くもない！
野蛮だね！」と大(おほ)びらに日本語(にほんご)で云はれて居る。
柬蒲塞(カンボヂヤ)の踊を賞めた RODIN《ロダン》が、
この見物の中(なか)に居るのぢやない、
いや、そんな大家(グラン、メエトル)が居たつて
この南洋踊を観たら逃げ出すだらう。
ああ！どんないい物でも、
どんな真剣(しんけん)な物でも、
日本の空気に触れると、
大抵みな萎(しな)びてしまふんだ！
精神を無くするんだ！

おれは近頃(ちかごろ)欧羅巴(ヨウロツパ)の往復に、

新嘉坡を二度観て、
南洋の生活を羨まずに居られなかつた。
そして巴里や羅馬を観て来た後にも、
やつぱり南洋を羨しいと思つた。
なぜだ？
人性を剥き出しにして、
真実の愛と戦闘とに力一ぱい生きる、
自由な世界としては、
巴里も羅馬も南洋の島も異りがないからだ！

おれはあたふたと南洋館を出てしまつた。
おれは福引に急ぐ、秩序のない、
有象無象の込み合ふ中を、子供を伴れて、
右に縫ひ、左に縫ひして歩いた。
それでも可なり大勢に衝突つた、
こんな場合にPARDON《パルドン》を言ひ合はないのが大日本だ！
そして、やつとのことで上を向くと、

おれの目に入つたのは、
煤煙で枯された梢と、
――欧州では独逸の一部でしか見当らない式の――
厭なセセツシヨンの建築と、
松井須磨子と云ふ女優の看板だ。

「父さん、早く帰りませうよ。」
「よし！」

（一九一四、八、二四）

青空文庫情報

底本：「反響」反響社
1914（大正3）年10月号
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の旧字を新字にをあらためました。
※底本の署名には、「よさの、ひろし」とあります。
入力：武田秀男
校正：門田裕志
2003年1月24日作成
2003年6月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南洋館

與謝野寛

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/